

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16734

研究課題名(和文) オーストロネシア語族比較文法論としてのラマホロット語動詞連続構文研究

研究課題名(英文) Serial verb constructions in Lamaholot: A comparative syntactic study

研究代表者

長屋 尚典(Nagaya, Naonori)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：20625727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究計画では、東インドネシア諸語であるラマホロット語の動詞連続構文を、フィリピン諸語であるタガログ語のフォーカス・システムと比較しつつ記述・分析した。その結果、カバーする機能領域、文法化の経路、補文構造、項/付加詞の区別の明確さ、従属節の性質などの点で両者が大きく異なっていることが世界で初めて明らかとなった。タガログ語の動詞形態論とラマホロット語の動詞連続構文の間に直接的な機能的継承関係はないと見るべきであろう。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I have investigated serial verb constructions in Lamaholot of eastern Indonesia in comparison to the focus system in Tagalog of the Philippines. My main finding is that Lamaholot and Tagalog differ with regard to the functions of the construction types in question, the grammaticalization paths, marking of an argument/adjunct distinction, and the nature of complement and subordinate clauses.

研究分野：言語学

キーワード：言語学

1. 研究開始当初の背景

東インドネシア地域のオーストロネシア語族の言語は、この語族の歴史を考える上で極めて重要である。なぜなら、フィリピン諸語・西インドネシア諸語で存在した動詞形態論が消滅し、かわりに動詞連続構文が発達したと想定されるからである。たとえば、同じような意味を表現するにも、フィリピンのタガログ語は動詞形態論を多用するが、東インドネシアのラマホロット語は動詞連続構文を使用する。

フィリピンのタガログ語

B<in>asah-an=ko=siya ng=libro.
read<RL>-LF=1SG.GEN=3SG.NOM GEN=book
「私は彼(女)に本を読んであげた。」

東インドネシアのラマホロット語:

Go basa nei na buku.
1SG read give 3SG book
「私は彼(女)に本を読んであげた。」

このように、歴史的にみた場合、東インドネシア諸語の動詞連続構文は、失われた動詞形態論の機能を補うような形で出現しているように見える。しかし、両者の関係を実際に比較検証した研究はない。

2. 研究の目的

この研究計画では、東インドネシア諸語であるラマホロット語の動詞連続構文を、フィリピン諸語のタガログ語との比較を通して分析することを目指した。

そのことによって、具体的には、[I]ラマホロット語の動詞連続構文を記述的に分析したうえで、[II]タガログ語のフォーカス・システムと比較し、[III]両者の共通点・相違点とその背後のメカニズムを明らかにしようとした。

3. 研究の方法

本研究計画は、[A]自然談話による動詞連続構文基礎データ、ならびに、[B]聞き取り調査質問票による比較対照データを収集することで上記研究課題に答えようとした。

さらに、研究の進展に従って、音声学の実験を行うことでタガログ語のイントネーションについて調査する必要がでてきたので、音声学の実験も行った。

4. 研究成果

平成27年度は研究計画の初年度として基礎的研究を集中的に行った。すなわち、動詞連続に関する理論的・言語類型論的文献調査ならびに[A][B]に基づくデータ収集である。平成27年9月にインドネシア、平成27年7-8月にフィリピンで調査を行いデータを収集

した。さらにその成果を The Thirteenth International Conference on Austronesian Linguistics や Affectedness Workshop 2015 などの国際学会ならびに国内学会で発表した。

平成28年度は研究計画の2年目として基礎的研究に加えて、[A][B]に基づくデータ収集を行った。平成28年9月にインドネシア、平成28年7-8月にフィリピンで調査を行いデータを収集した。その成果を日本言語学会、26th Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society などの国際学会ならびに国内学会で発表した。さらに、ラマホロット語の節連結において重要な insubordination について論文を執筆し、発表した。

平成29年度は研究計画の最終年として基礎的研究に加えて[A][B]に基づくデータ収集とその整理、論文執筆を行った。平成29年9月にインドネシア、平成29年8月にフィリピンで調査を行いデータを収集した。その成果を日本言語学会、International Conference on Role and Reference Grammar などの国際学会ならびに国内学会で発表した。これらの学会発表の成果は現在、論文化しているところである。さらに、ラマホロット語の節構造を理解するために重要な指示詞・前置詞の問題、ならびにタガログ語のプロソディーについて論文を執筆し、発表した。

これら3年度にわたる研究を通して、期間全体として以下のような発見があった:

- ラマホロット語の動詞連続構文にはさまざまなタイプがある。特に、動詞「する」を用いた動詞連続構文の多機能性は注目に値し、その機能は必ずしもタガログ語の動詞形態論のもつ機能に還元されるわけでもないことが判明した。(学会発表13, 論文執筆中)
- ラマホロット語の動詞連続構文の特殊な文法化パターンを発見した。(学会発表13, 論文執筆中)
- 両言語の違いを導く最大の要因として、孤立語化の結果起きたラマホロット語とタガログ語の節構造に関する違いがあることを明らかにした。具体的には、補文構造の違い(学会発表4, 論文執筆中)、項/付加詞の区別の明確さの違い(論文3, 論文4, 論文8)、従属節の性質の違い(論文6)があることがわかった。アスペクトについても両言語は異なるが、それはこの問題とは直接につながりはないであろう(論文5, 7)。
- したがって、研究目的に対する直接

の答えとしては、タガログ語の動詞形態論とラマホロット語の動詞連続構文の間には機能的継承関係は（歴史的にはあるように見えても）ないと考えたほうがよさそうである。

- この他にも、本研究計画を遂行する過程で、両言語にかかわる記述研究を進めることができた。特に、タガログ語のプロソディーに関わる研究は本研究計画で初めて実験的に行われたものである（論文1など）。さらに、タガログ語の所有文・存在文についての基礎的研究もおこなった（論文2など）。

本研究計画では少なくとも以上のようなことを明らかにしたが、これらの成果を調査票、自然談話、実験的手法を駆使して明らかにできたのは重要なことである。

このように本研究は、上記研究目的を達成するのに十分なものであった。一部の成果が論文化の途上であるものの（査読中、執筆中）、論文にできたものも多く、また、国際学会を主催し、複数の国際学会・国内学会でその成果を広く公開できた点でも意義深い。

これらの研究成果は、国内外のオーストロネシア諸語研究に影響を与えることが予想される。このように詳細な記述に基づいてフィリピン諸語と東インドネシア諸語を比較した研究はないからである。さらに、形態論的複雑さと言語の複雑さ、動詞連続構文の本質などの諸トピックをめぐる、広く言語学一般にインパクトを与えることになるだろう。

今後の課題としては、鋭意、残りの成果について論文化を進めていくと同時に、本研究計画から派生してでてきた学問的問題（イントネーションや情報構造の問題など）に取り組むことがある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 8 件)

Nagaya, Naonori & Hyun Kyung Hwang. 2018. Focus and prosody in Tagalog. Sonja Riesberg, Asako Shiohara, and Atsuko Utsumi (eds.) Perspectives on information structure in Austronesian languages, 347-360. Studies in Diversity Linguistics. Berlin: Language Science Press. (査読あり)

長屋尚典. 2018. タガログ語の存在と所有のあいだ. 東京大学言語学論集 39: 223-242. (招待につき査読なし)

長屋尚典. 2017. タガログ語の幸福論. 東京外国語大学論集 94: 53-68. (査読なし)

Nagaya, Naonori. 2017. Demonstrative prepositions in Lamaholot. NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia 63: 45-61. (査読あり)

Nagaya, Naonori. 2016. Perfect in Tagalog. Southeast Asian Studies TUFSS 21: 1-14. (査読あり)

Nagaya, Naonori. 2016. Searching for insubordination: An analysis of *labo* in Lamaholot, NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia, 59: 33-45. (査読あり)

長屋尚典. 2015. ラマホロット語のアスペクト辞 *morã* の二つの解釈と話者の知識. 東京外国語大学論集 91: 57-68. (査読なし)

長屋尚典. 2015. ラマホロット語の自他交替. プラシャント・パルデシ, 桐生和幸, ハイコ・ナロック (編) 『有対動詞の通言語的研究 - 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』, 189-204. 東京: くろしお出版. (査読あり)

〔学会発表〕(計 21 件)

長屋尚典. 2018. 西オーストロネシア諸語の文法書. 「参照文法書研究」2017年度第2回研究会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2018年3月7日.

長屋尚典. 2017. NPO 法人地球ことば村主催市民フォーラム「言語の多様性はなぜ必要か 少数話者(危機)言語の研究支援と言語の多様性に関する意識啓発」ワークショップ講師 (2017年1月22日)

長屋尚典. 2017. タガログ語の存在と所有のあいだ, 日本言語学会第154回大会, 日本言語学会, 首都大学東京, 2017年6月24-25日.

Nagaya, Naonori. 2017. On the nature of complementation in Tagalog. International Conference on Role and Reference Grammar, The University of Tokyo, Komaba, August 1-3, 2017.

Nagaya, Naonori. 2017. Focus and prosody in Tagalog: An experimental study. 95 years of UP Linguistics, Department of Linguistics, University of the Philippines, Diliman, Quezon City, August 24, 2017.

Nagaya, Naonori. 2017. Confirmational in Tagalog: An interim report. The sixth project meeting. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, October 7, 2017.

Nagaya, Naonori & Florinda Amparo Adarayan Palma Gil. 2017. Teaching Filipino: The Case of Tokyo University of Foreign Studies. Foreign Language Summit 2017, University of the Philippines, Diliman, Quezon City, October 18-20, 2017.

Florinda Amparo Adarayan Palma Gil & Naonori Nagaya. 2017. CEFR-Based Can-Do Approach to Teaching Filipino as a Second Language. Foreign Language Summit 2017, University of the Philippines, Diliman, Quezon City, October 18-20, 2017.

長屋尚典. 2017. 会話コーパスから考えるタガログ語文末助詞. 『認知言語学と談話機能言語学の接点』研究会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017年12月10日.

Nagaya, Naonori. 2016. The Tagalog *ano* 'what': From interrogative to discourse marker. Discourse Markers and Discourse Connectives in Several Languages, Institute of Language Research, Tokyo University of Foreign Studies, January 13, 2016.

Nagaya, Naonori & Hyun Kyung Hwang. 2016. Focus and prosody in Tagalog: A preliminary analysis. The third International Workshop on Information Structure in Austronesian Languages. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, Fuchu, Japan, February 18-20, 2016.

長屋尚典. 2016. ラマホロット語における *əʔə* 「作る」による動詞連続とその文法化, Luncheon Linguistics, 東京外国語大学, 2016年5月18日.

Nagaya, Naonori. 2016. Grammaticalization of the verb *əʔə* 'make' in Lamaholot, The 26th Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society., Manila, Century Park Hotel, May 26-28, 2017.

長屋尚典. 2016. タガログ語のリンカー並行事態構文と節連結, 日本言語学会第153回大会, 日本言語学会, 福岡大学, 2016年12月3-4日.

Nagaya, Naonori. 2015. "Motion

expressions in Tagalog: A cross-linguistic experimental study" (フィリピン大学ディリマン校言語学科 94 Years of UP Department of Linguistics における特別講演; 2016年8月12日)

長屋尚典. 2015. タガログ語の naka-結果状態構文, 第150回日本言語学会, 大東文化大学, 2015年6月20-21日.

Nagaya, Naonori. 2015. Possession and nominalization in Lamaholot, Thirteenth International Conference on Austronesian Linguistics, Academia Sinica, Taipei, Taiwan, July 18-23, 2015.

Nagaya, Naonori. 2015. Resultatives and reversibility in Tagalog. 93 Years of UP Department of Linguistics, University of the Philippines, Diliman, August 5, 2015.

Nagaya, Naonori. 2015. Affectedness and volitionality: The case of Tagalog, Affectedness Workshop 2015: Verb Classes and the Scale of Change in Affected Arguments, Nanyang Technological University, Singapore, August 13-14, 2015.

長屋尚典. 2015. 意志と知識: タガログ語のヴォイス現象. 成蹊大学アジア太平洋研究センター・研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究 - 英語・日本語・アジア諸語を中心として -」2015年度第2回研究会, 成蹊大学アジア太平洋研究センター, 2015年10月11日.

②長屋尚典. 2015. 使役と事象構造: 重なる使役、繰り返す使役. 日本言語学会第151回大会ワークショップ パネル, 名古屋大学, 2015年11月28-29日.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

長屋尚典. 2017. リレーエッセイ「ことば紀行」第31回「タガログ語」, Publisher's Review, 東京: 白水社.

長屋尚典. 2017. 東京外国語大学 CEFR-J

×27 言語プロジェクト発 もっと知りたい！
世界のことば [10] タガログ語. 『英語教育』2018年1月号. 大修館書店.

長屋尚典. 2016. 「越境する」. 東京外国語大学言語文化学部 (編) 『言葉から社会を考える ～この時代に〈他者〉とどう向き合うか～』, pp. 92-94, 東京: 白水社.

長屋尚典. 2016. フィリピンの言葉は繰り返す. 『東京外国語大学オープンアカデミー2014年度後期開講講座 言葉とその周辺をきわめる3活動報告書』, 71-93. 東京: 東京外国語大学 語学研究所.

長屋尚典. 2015. 「アラインメント」「意志性」「一致」「格」「空間参照枠」「屈折・派生」「形態素」「形態論」「形態論的プロセス」「形容詞」「言語類型論」「語」「項構造」「語順」「語類」「主語」「所有」「数」「数詞」「接近可能性の階層」「接語」「接辞」「側置詞」「重複」「動詞」「動詞化」「フィリピン・タイプ」「文法関係」「名詞」「名詞化」「有標性」「連続体」, 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』東京: 三省堂.

長屋尚典. 2015. フィリピン料理-やさしい国のおいしい料理-. 沼野恭子 (編) 『世界を食べよう! 東京外国語大学の世界料理』, 70-75. 東京: 東京外国語大学出版会.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長屋 尚典 (NAGAYA, Naonori)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院
講師

研究者番号: 20625727

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし